

ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ

——ハンガロフ歴史博物館所蔵「ドルジェフ文書」の分析を中心に——

浅井 万友美

1 はじめに

ロシア連邦ブリヤート共和国ウランウデ市の中心部に建つハンガロフ歴史博物館には、ダライラマ 13 世 (1876–1933。以下、13 世とする) 代にチベットからブリヤート人チベット仏教僧アグワンドルジェフ (1853/54–1938) などに宛てて送られた 50 通ほどの書簡が保存されている (便宜上、以下では「ドルジェフ文書」と総称する)。近年その存在が確認され、研究者らの閲覧が可能になった。本稿は筆者が 2008 年 3 月に現地で行った史料調査にもとづき、同文書の紹介とともに若干の分析を試みたものである。

文書の詳細に入る前に、ドルジェフという人物について簡単に紹介する。彼は現ウランウデ市北東の Muhor-Shibir で身分の低い両親のもとに生まれ 15 歳で結婚するが、19 歳のとき仏教を学びたいと志を立て故郷を出てチベットへ向かった。ラサ近郊の大寺院で学び、仏教の学位であるゲシェー位を異例の速さで得ると同時に、ダライラマの教義問答の訓練における相手役、教師であるツェンシャプの地位に就いた。しかし、一説によれば 13 世をとりまく諸勢力の抗争にまきこまれたことが原因で、13 世の命を受け 1897 年にチベットを離れた。その後 1904 年には、イギリスによる軍事的圧力を避けて亡命しようとする 13 世をモンゴルへ導き、さらにサンクトペテルブルクでチベットに対するロシア皇帝の支援を求める活動を行った。1913 年には、モンゴルの首都イフ・フレーでチベット側代表としてチベット・モンゴル条約に調印した。

このようにチベットと他国との関わりにおいて重要な役割をはたす一方で、チベットを離れたあとの彼はブリヤートを中心とした地域で、広くモンゴルの文化やチベット仏教を守るための活動に力を注いだ。特にソビエト連邦成立後には、1923 年のブリヤート・モンゴル・ソビエト社会主義自治共和国成立に大きく貢献し、また仏教信仰を共産主義思想と共存させるために尽力した。1921 年からは駐ソ「チベット公使館代表」として、チベットとロシアの関係構築に努めた。最後はスターリンによる大粛清の中、スパイ行為による大逆罪他のかどで逮捕され、1938 年ウランウデの獄中で亡くなった。このようにドルジェフの活動範囲はチベットのみならず、生地ブリヤートを含むロシア領内のチベット仏教徒の住む地域、またモンゴルに広がっていた。

チベット史において彼の事績や影響としてまずあげられるのは、13 世とロシアを結び付けようと努めたことである。外国人でありながら 13 世の信頼を得、遠くはなれたロシアに 13 世の目を向けさせた。ロシアの政治体制が帝政から共産主義政権に替わり仏教信仰にとって脅威的

存在となった後も、チベットとロシアの間を結ぼうと努めた。そうした動きの一面を「ドルジェフ文書」が明らかにしている。後で少し詳しく触れるように、「チベット代表」としての地位を認められた後はサンクトペテルブルクの仏教寺院⁽¹⁾を拠点に、チベットとの接触を図るロシア共産党政権の思惑を担いながら、13世の名代として活動した。もう1点は、彼の活動が英露による「グレートゲーム」の一方の当事者であるイギリスの武装使節団チベット派遣を招いたことである。英印官憲の監視をすり抜けロシアと接触した彼を、イギリスはロシアのスパイであるとして強く警戒し、それまで控えていたチベット侵出にふみきったのである。これによって13世は亡命を強いられ、5年余をモンゴルや中国で支援者を求めながら流浪の日々の中で過ごすことになった。

2 「ドルジェフ文書」の概要

2.1 史料の概略と来歴

「ドルジェフ文書」は、13世や同時代のチベット政府枢要メンバー、チベット留学中のブリヤート人仏教僧などからドルジェフほかに宛てて送られた書簡群である⁽²⁾。チベット語で書かれた49件のほか、4件のモンゴル語文書を含む。すべて手書きで、多くに押印があり、一部は封筒やその代わりに包み紙とともに保存されている。紙はチベット製と思われる半畳近い大きさのものや、罫線の印刷された大学ノート様のもなど、いくつかの種類が見られる。筆記具はおそらくチベットの伝統的な竹ペンなどで、ウメーに属するいくつかの書体が用いられている。

これらは近年、ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・仏教学・チベット学研究所研究員、ニコライ・ツイレンピロフ氏により「発見」、整理されたものである。ドルジェフは前述の1937年の逮捕のほか1918年にも逮捕監禁されており（Andreyev 2003, 72-73）⁽³⁾、そうした際にロシア共産党政府内務人民委員部などによって行われた没収⁽⁴⁾を免れた所持品の一部である可能性を指摘できるが、ハンガロフ博物館の所蔵となった経緯は確認できなかった。同博物館の関係者は文書の存在を知っていたものの、これまで適任者が不在で調査されることがなかった。それをツイレンピロフ氏が依頼されて整理し、内容確認のうえで今後史料集として出版する計画であるという。

新出の史料としてはまず文書自体の真偽を判断すべきであるが、現時点では保留としたい。それはハンガロフ歴史博物館との契約において筆者に許されたのが筆写のみであったため、現在筆者の手元に文書の複写がなく、判断の材料に欠けるためである。ただし、使われている紙や筆記具、印章、筆跡、つづり、文体、内容などを調査時に確認し、本物である可能性がきわめて高いと推測している。ツイレンピロフ氏も同意見である。

2.2 発信者と発信時期

49件のチベット語書簡のうちもっとも多くを占めるのは13世からのもので19通、続いて13世の寵臣でその右腕として近代化政策を推進したことで知られる大臣ツァロンからのものが5

—ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ—

通、同じく政府内で高い地位と大きな力を持っていたスィールン職⁽⁵⁾のシューカンと内閣から各 2 通の文書が確認できる。ほかにプリヤート出身で「チベット代表」としてのドルジェフの補佐役を務めたカンギェルラマから 2 通、パンチェンラマ 9 世からと思われるもの 1 通、またおそらくドルジェフの弟子である僧たちからのもの、13 世からロシア皇帝に宛てた形でドルジェフが代筆したのではないと思われる草稿などが含まれ、不明のものも 8 通ある。

差出人のこうした顔ぶれを見ると、ドルジェフが 13 世を初めとするチベット政府中枢部と直接のつながりを持っていたことがわかる。次に述べるように「ドルジェフ文書」の多くは 1920 年代半ば、つまりドルジェフ離蔵後 20 年以上たってからのものである。1897 年にチベットを離れて後、彼がラサに長期間とどまることはなく、また 13 世の亡命という事態や彼に対する英印官憲の監視の目があったことから、彼とチベット要人との関係が公然と維持されていた可能性は低い。断絶していた時期があったと考えられ、それを裏付けるかのように、チベット暦辛酉（1921）年 9 月 30 日の発信日付が記された DM18618 には、久しぶりのやり取りであることを示唆する件がある。また、1913 年のチベット・モンゴル条約調印以後、彼がチベット史の表舞台に現れることはほとんどない。そうした空白時期を経て 1920 年代にはツァロンやシューカンといった、チベット政界中で外国勢力と近い立場とされる要人とのつながりが復活していたことを、「ドルジェフ文書」から見ることができる。

差出時期については、記されている日付によって 1911 年から 1927 年までのものが確認できており、1924 年が 19 通ともっとも多く、その前後の数年を含めると半数近くが 1920 年代半ばに集中している。具体的には 1914 年が 3 通、1911 年と 1913 年、1921 年、1925 年、1926 年、1927 年が各 1 通で、日付欠如ながら内容などから推測して 1924 年以降であると思われるものが 6 通、不明なものも 15 通ほどある。

1924 年突出している理由としては、まず前年の 1923 年末に発生したパンチェンラマ 9 世亡命事件があげられる。1880 年代に起きたチャンドラ・ダース入蔵関係者の処罰に起因するダライ・パンチェン両ラマの不和（Dhondup 1986, 5）は、チベット政府によるパンチェンラマ領への課税によりさらに悪化し、パンチェンラマによる抗議の亡命という結果となった。パンチェンラマが外国勢力と結んで自らをおびやかす存在となることを恐れた 13 世はパンチェンラマに帰国を呼びかけ、ドルジェフに事態収拾への協力を依頼した。それを受けてドルジェフはパンチェンラマを説得しようとフレヘ、さらに北京へと出向いた。「ドルジェフ文書」にはドルジェフから報告を受けたことを述べた 13 世からの書簡や、ほかにチベットの内閣やスィールンからのパンチェンラマ問題に関する同様の協力依頼文も含まれている。

1924 年にはドルジェフとチベットを結ぶ大きなできごとが、もうひとつあった。それはロシア共産党中央委員会シベリア局付設東方諸民族部モンゴル・チベット課課長ポリソフを団長とする使節団のラサ訪問である。これについては後にまた触れるが、ポリソフらは到着の翌日に 13 世と面会し、その後 3 か月ほどラサに滞在した。チベット側は彼らを公式な来訪者として迎えていないが、ドルジェフと 13 世を直接結ぶ人物の往来が文書のやり取りを促進した可能性が十分考えられる。

2.3 限定的な性質

これまで一般に存在を知られていなかったチベット語史料として、「ドルジェフ文書」の持つ価値は大きい。しかし、非常に限定的な性質を持つことも指摘しておかなければならない。まず、同文書が二者間のやりとりのうち一方のみのものであるという点である。ドルジェフからの返信の一部がチベットのどこかに保存されている可能性も十分にあるが、中国での档案等の公開状況から判断して現在それらを閲覧する機会を得ることは、残念ながら非常に困難である。また、13 世らチベット側とドルジェフとの間では同文書のほかに知人等を介した手紙や口頭の伝言といった他の通信手段も使われており、同文書が送り手と受け手の用件および意図をすべてもれなく伝えているとは考えにくい。さらに、同文書が両者間で断続的に行われた通信を網羅している確証はなく、ドルジェフ自身あるいは前述の所持品押収を経て内務人民委員部等の第三者によって選ばれ、残されたものである可能性も十分考えられる。

このような限定的な性質を持つものである上に、当該文書の多くは難解な文体で書かれており、筆者はまだすべてを読解できていない。分析も途上であるため非常に限定的で留保の多い状態であるが、現時点で何が読み取れるか、以下おもに 13 世からの書簡を中心に分析を試みたい。

3 「ドルジェフ文書」の内容分析

3.1 文書に記された主な用件

上述のように「ドルジェフ文書」のほとんどはチベットから書き送られた、いわば一方通行のものであるが、13 世の記した文面には用件の確認のためにドルジェフからの手紙の内容が簡単にくり返されていることが多く、ドルジェフの側からどのようなことが伝えられたかを知ることができる。両者間の話題としてもっとも頻繁に見られるのは、パンチェンラマ亡命に関連する内容である。上述のようにダライラマとパンチェンラマの不仲にも遠因があるこの事件は、チベットが抱える国家的難題だった。13 世のみならずスィールンや内閣がそれぞれドルジェフに対して問題解決への尽力を求めているのは、パンチェンラマの不在と彼の動向がそれだけ大きく深刻な問題としてとらえられていたからだろう。ドルジェフは彼らの要望に応じてフレーや北京で活動し、パンチェンラマ説得を試みた。そして、その報告や関連情報をチベットに書き送った。

引用 1

paN chen de phyogs gsang phebs skor ru rgyal du go thos byung 'phral khyod rang khu ral du 'byor te rnam grwa byams pa thogs med dang/ byabs khru bla ma gnyis nas lcags skud 'byor gsal paN chen pi cin du zla 8 tshes 15 nyin phebs rgyur khyod rang ngo mjal dge skyon zhu dgos brjod don ngal ba 'dzems med kyi pi cin du zla 8 tshes 17 nyin 'byor pas ngos kyi gnas tshul/ blon bka' so so'i gnas rgya 'byor pa

—ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ—

貴下（ドルジェフを指す。引用者＝筆者注。以下、引用内で引用者とある場合は筆者である）はパンチェンラマがそちら方面へ秘密裏に行かれたことをロシアにおいて知るや、自らクレーへ出向き、〔そこへ届いた〕ナムギュー僧院のチャンパトクメーとチャプトゥーラマからの電信に「パンチェンラマは 8 月 15 日に北京へ到着するので、面会してことの善悪を説いてほしい」とあったので、苦勞をいとわず北京へ〔向かい〕8 月 17 日に着いたところ、私およびスィールンと内閣とからそれぞれ手紙が届いた〔とのこと〕。(DM18601)⁽⁶⁾

ドルジェフはさらに次のような活動案を 13 世に伝えている。

引用 2

deng skabs rgya nag nang 'khrug la brten gtsang zhabs blo 'gyur cha rtogs dka' bas zhib nyan bgyis rtsis yod pa/ paN chen la gzhung khongs sa gnas phyed dbang skor rmongs zhen brdzun gtam 'bir grags skor la lo rgyus khungs dag gis tsha par bkram rtsis/ paN chen ngo mjal gyi dge skyon zhu thub na dang/ de min mkhan mgron can la go bsdur gang shes byed rtsis yod pa/ ……ru dmar blon chen kha ra han zhes pa de gar chin khral du 'byor nas rgya dang ching bzhag yod mus la kun gzigs mchog nas phyag sprel tshe phan med gnod 'gyur gyi rgyu rkyen rt'a tsung la gang drag zhu rtsis

最近の中国内の混乱によりツァン（パンチェンラマを指す。引用者注）の従者の心境の変化は推測しがたいので、詳しく聞いてみるつもりであること。チベット政府に属す地域のうち半分の支配権がパンチェンラマに〔あるという〕話は愚かな思いこみで事実無根のデマであることについて、信頼すべき歴史的事情を〔示して〕新聞に載せるつもりであること。できればパンチェンラマに面会してことの善悪を申し上げたい〔とっており〕、そのほかチキャプケンポやドンニエルチェンモらとできるかぎり協議しようと思っていること。(中略) ソビエトロシアのカラハンという大臣⁽⁷⁾がそちらのチンテーに到着し、中国と条約を締結中であり、パンチェンラマが〔彼らと〕手を結んだ場合に生じる不利益と損害の理由を何とかして大総統に伝えるつもりであること。(DM18601)

すべてが実行に移されたかどうかを「ドルジェフ文書」で確認することはできないが、パンチェンラマ問題に関してチベット政府側がドルジェフに対し大きな期待を寄せ、彼が少なからぬ勞力をもってそれに応えようとしたことがわかる。そうした経緯を知ってのことだろう。ドルジェフは問題の当事者であるパンチェンラマあるいは同ラマに非常に近い人物から、亡命の理由と心情について詳しく書かれた 1 通も受け取っている (DM18623)。

続いて「ドルジェフ文書」に頻繁に現れるのが、仏教信仰に関わること、中でも目立つのがドルジェフから 13 世に対して各種の支援や協力を依頼する内容とそれに対する 13 世の回答である。ドルジェフはブリヤートやサンクトペテルブルクなどにチベット仏教寺院を建立し、信仰活動推進とそのための環境整備に努めたが、物質的にも人的にも不足が多かった。それを解消しようと 13 世に支援を求め、13 世が回答している例を次にあげる。

引用 3

de ga'i dgon du dpal ldan smad rgyud grwa tshang gi phyag srol bzhin rgyud grwa btsugs par 'chad nyan slob spel thag ring nas gdan zhu ma thub pas rgyud smad dge bshes shes rab bzang po gtong

—ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ—

dgos de dgon bzhi'i ser skya thun mong nas zhu rgyu'i rten rin dang 'khor lo che ba gcig phul 'byor
ltar rim gsal chog pa ……dgon khag drug so sor bslu rin ji gnas phul 'thus su bka' 'gyur cha tshang
re par 'debs gtong dgos skor rjes su rim gsal chog pa

そちらの寺においてラサのギューメー寺の方式通りに密教学堂を創設したが、仏教の教授を行う阿闍梨を遠くから招くことができないので、ギューメー寺のゲシェー、シェーラブサンポを派遣してほしいということを4つの寺の僧俗の人々が揃って願い出て〔おり、そのための〕贈り物として、大型の金製法輪を送った〔とのこと。それは〕着いており、〔要望〕通りに追々明らかにし許可する。(中略)いくらであろうとかかる分だけの代金を払うつもりなのでカンギユルのセットを印刷し6軒の寺それぞれに送ってほしいという件は、追々明らかにし許可する。(DM18589)⁽⁸⁾

もちろんすべての依頼を承認しているわけではなく、次のように13世が厳しい言葉を返している例も見られる。

引用 4

rin chen bden pa/ thor rgod sbyin pa tshul khriims/ chos grags mkhas grub rnam lha ram sprad de
gtong dgos skor/ sa phag phan khyed rang mtshan zhabs nas kyang lha ram ming blangs slob gnyer la
blta bzo gang yang med rung/ bstan rgyun bshad sgrub dwags ther ched deng skabs 'chad nyan bzang
zhan gyi lha ram sprod gtong rgyas bcad zin don lam seng sprod bde med

リンチェンデンパとトルグートのジンパツァーティム、チューターケードゥップに〔ゲシェー・〕ラランパ位を与え〔命名式を〕行ってほしいという件は、己亥年(1899年。引用者注)まではツェンシャプである貴下も、ラランパ位を取った学習者に対し〔学習成果を〕調べる方法が全くなかったが、仏教の伝統、教えと実践を改善するために最近では学習〔成績〕の良し悪しに〔よってラランパ位を与え命名式を行うと〕決まっている。よって〔彼らにラランパ位を〕すぐ与えるのは容易なことではない。(DM18605)⁽⁹⁾

また、ドルジェフはロシアにおけるチベット仏教信仰の状況や環境について13世に報告している。

引用 5

phi thir lha khang du ru su nang par 'gyur mi re gnyis yod pa blo bzang bshad sgrub can ru su'i skad
yig shes mi rnam nas nang chos slob rtsis

ペトログラード⁽¹⁰⁾の寺に仏教へ改宗したロシア人が1, 2名いて、ロサンシェートゥプらロシア語がわかる者たちから仏教を学ぼうとしていること。(DM18605)

引用 6

sbo rad thu pa rnam bstan pa chos lugs skor tshogs 'du tshogs te dus bstun bca' khriims bcad par grwa
rigs rnam 'dul khriims mthun khul yang bla grwa 'ga' re yul khriims mi shes skyid bde phal cher mi
'dod pa

ブリヤートの人々が仏教に関して会議を開き、時代に合わせた法規を制定した(khriims bcad

—ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ—

は「処罰」を意味するが、同音異綴りの khirms bcas (制定) として読んだ。引用者注) と
ころ、僧たちは戒律を守っているようであるが、一部に地域の法を理解せず幸福〔な状態〕
をほとんど承服しないラマや僧侶がいること。(DM18605)

このように共産党統治下のロシアでブリヤートや他地域のチベット仏教信仰者たちが置かれ
た環境について述べるのみでなく、同党の政策も積極的にチベットに知らせている。

引用 7

khyod rang rgan gzhon bar gsum la nyer 'tshe med pas rgyal khag phan tshun la'ang 'gro bskyod
chog pa'i gros mthun byung ba/ khul der rgyu nor 'phel rgyas gang legs yod pa/ lcags bya lo phyi
rgyal khag la gros byol du 'gro mi nmams da cha tshur log gi dka' ngal med par yig rtsis slob mus/ khal
mig tshogs 'du chen po gsum bgos te des khirms gsar byed bzhin gyi deng skabs dmag zing gis dgon
pa nyams 'jig nmams nyams gso gsar rgyag dang 'brel bas mtshan nyid grwa tshang gsar tshugs kyi
dge 'dun 'phel rgyas ched phru gu lo gzhon nam bsgrigs bcug/ chu khyi lo mu ge byung rung/ ru si
gzhung nas phan thabs kyi skyon med byung ba

貴下たちみなに被害はなく、各国間を行き来してよいという合意が得られたこと。そちら
の地域では財産が大いに増えていること。辛酉年(1921年。以下の記述は、カルムイク人
仏教徒が共産党勢力による迫害を避け、トルコなどに避難したことを指すと考えられる。
引用者注)に外国へ逃げた者たちが今戻ってきて、困難もなく教育を受けていること。カ
ルムイクが大会議を3つに分け、それによって新法を施行しているところであり、最近
は戦乱で荒廃した寺院を修理し再建するとともに、ツェニー学堂を新設して僧伽発展のため
幼い子どもたちを出家させていること。壬戌年(1922年。引用者注)に飢饉が発生したが
ロシア政府の有効な方策により損害がなかったこと。(DM18602)⁽¹¹⁾

用件にはほかに東アジアの情勢や、ロシア産錦がしばしば取り上げられている。また、ロシア
やモンゴル、中国などの動向とともに、北京で中国側とチベットおよびモンゴルについて協議
していたソ連大使カラハンの動き、およびコズロフのチベット探検計画も話題に上っている。
ピョートル・クズミッチ・コズロフはロシアの地理学者、考古学者であると同時に探検家でも
あり、この頃フレーなどでチベット政府から入国許可が出るのを待っていた。西洋人がチベッ
トへ入ることを厳しく制限していたイギリスの意向を考慮しつつ、13世はその動きを注視して
いた。ドルジェフが13世の要請に応え、彼らの動向や関連情報を知らせていたことがわかる。

錦についての情報がやり取りされたのは、それがチベットの寺院で柱の装飾用などに用いら
れ非常に貴重なものとされていたためである。しかしチベット内で産せられないので、中国や
日本、ロシア産のものが珍重された。「ドルジェフ文書」中、13世に次いで数が多いツァロン
との間の用件は主にそのチベット輸入のことであるし、1921年ごろにパンチェンラマから送ら
れた可能性のある1通は、錦に対するチベット人の関心の強さをよく示している(DM18576)。

ドルジェフと13世との間で話題とされたこうした事柄が、彼らにとっての懸案事項であつた
のは疑いのないことだろう。その一方で、「ドルジェフ文書」では語られない事柄があつたこ
とも指摘できる。同文書の大半がやり取りされた時期、つまり1924年とその前後、チベットと

—ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ—

ロシアが相手に関してもっとも強く求めていた情報が追求されていないからである。それは共産主義政権に対する 13 世の疑念への回答であり、ロシアが知ろうとしていたチベット国内の情勢である。また、ドルジェフと 13 世にとって軽視できなかったはずであると思われるできごととして、1924 年には 1 月 21 日のレーニン死去や、モンゴルにおける 5 月 20 日のボグド・ハーン死去と 11 月 26 日の人民共和国成立、またイギリスほかヨーロッパ各国によるソビエト社会主義共和国連邦の承認などがあつた。一方チベット国内では軍部と警察の抗争が起き、軍部の決起とそれに対するダライラマによる処罰という事態が発生しそうな臭さが漂っていた。これに関連して、大臣ツァロンが降格されてもいた。同大臣はドルジェフ同様 13 世のモンゴル亡命に同行しており、また錦に大きな関心を寄せていた 13 世自身が、錦を介したツァロンとドルジェフのつながりを知らない可能性は非常に低い。13 世は書簡上であえてそうした話題に触れなかったものと考えられる。

3.2 「ドルジェフ文書」が示す「チベット代表」像

「ドルジェフ文書」を通して見えてくることのひとつに、ドルジェフの「公使館代表」としての姿がある。次にやや詳しく述べるように、彼は 1922 年、13 世によってソビエトロシアにおけるチベット代表に任じられた。また同年末にはロシア共産党政権から、自身による建立のペトログラードの仏教寺院にチベット代表部を置くことを非公式ながら認められ、チベットの全権代表として承認された (Andreyev 2003, 156)。

パンチェンラマ問題において 13 世のみならず内閣やスィールンからも協力依頼が行われたのは、彼がこうした立場にあつたため、その地位によって国境をまたいだ迅速な動きが可能になったのだろう。彼が共産党政権から外交官特権を認められており、特に外国との往来を許されていたことは「ドルジェフ文書」にも書かれている。同ラマに面会するためモンゴルや中国に赴き、カラハンを通じて中華民国大総統、および当時の北京政府でもっとも強い勢力を持っていた呉佩孚にも問題解決への協力を求め了解を得たと、13 世に報告している (DM18598)。また、チベット政府のある僧官によりソビエトロシアへ派遣され、そこで言葉や火薬製造技術を身に着けたモンゴル人に対し、ペトログラードの公使館が報酬を払ったことが報告されており、これも代表としての立場から行われたものと理解できる。13 世に東アジア情勢を知らせたり、チベットに入国しようとするロシア人の動向を把握しようとしたのも同様であろう。

しかし「公使館代表」の地位がチベット政府によって正式に認められたものだったかどうかについては、大きな疑問が残る。Andreyev (2003, 156) によれば、13 世によるドルジェフの「代表」任命は後に彼の弟子に対して行われた尋問における証言で述べられている。弟子は師匠から聞いた記憶からそう語ったという。しかし、任命を伝える 13 世の手紙自体はおそらくまだ史料として研究対象となっていない。また、「ドルジェフ文書」において彼を「代表」と位置づける記述は見当たらず、彼への呼称に「代表」に該当するもの、あるいはダライラマの「代理」を意味する語も 1922 年以後の書簡には見られない⁽¹²⁾。彼に対する呼びかけの語は、彼が 1897 年にチベットを離れる前の役職であるツェンシャブ、あるいはそれに由来する別称のツェニーケンポ、側近を意味するクチャーなどのみである。

さらにはチベットで彼の来訪を懸念する声が大きかったことも、彼の「代表」職が正式なも

—ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ—

のではなかった可能性を示唆している。後でやや詳しく述べるようにロシア共産党政権はチベットへ使節団を送ろうと試み、2度にわたって派遣を実施した。その第二陣が前述のボリソフらで、1923年9月にフレーに到着していた。実際にはオイラト生まれのボリソフらが巡礼を装ってラサへ向かおうとしていたのだが、噂としてドルジェフと複数の共産主義者からなる一団であるという誤報がラサに達し、チベット側をあわてさせた。13世は1924年3月付けの手紙(DM18607)において強い言葉でドルジェフの来蔵を制し、さらに内閣とスィールンからも同趣旨の文書をドルジェフ宛てに送らせている(DM18603)。彼がチベットを代表し13世の代理を務める立場であれば、13世らが彼の行動をあわてて止めなければならないという事態は考えにくい。

「チベット公使館代表」としての立場からみれば奇妙なことに、ドルジェフはロシア共産党政権の対チベット政策の協力者でもあった。そのような役割を持つことになった発端は、1918年に彼がカルムイク周辺で逮捕された際、革命新政権への協力を釈放の交換条件として示されたことが関係していると思われる。先行研究が指摘しているように(Andreyev 2003, 73)、イギリスに好意を持たない彼にとって、同政権がチベットとの関係を進展させるのはむしろ歓迎できることだったので、その条件をのんだとみるのが自然である。

この頃、同政権がチベットに目をむけたのは主に経済面で資本主義に対抗するための市場としてであり、20世紀初頭以来とだえていた通交を再開するにあたって、まずチベット情勢を知る必要があった。そのために使節派遣が検討され、すでに共産主義勢力に対し強い警戒感を持っていたチベット政府とその官憲の目をごまかすため、ドルジェフの助言に従って聖地巡礼の仏教徒を装うという方法がとられルート作りなどが行われた。使節は1922年と1924年にぶじラサまで達し、13世謁見を果たした。それは非公式なものだったが、13世はボリソフが「博識で、国家から信頼を得ている」人物であり、同行のバヤルトゥを「信仰心厚い」と高く評価している。そして、後者が「現在と将来のさまざまなことを内々に相談するのに適した人物である」というドルジェフの勧め通りに、すでに話しをすませたとドルジェフに書き送っている⁽¹³⁾。チベットと関係を持つには仏教に拠るべきだというドルジェフのやり方が奏功したといえるだろう。

先に述べたように、ドルジェフはロシア領内のチベット仏教徒がおかれた環境、言い換えればロシア共産党政府による宗教政策の一面を伝えながら、同政権のもとで歓迎すべき状況が実現していることを伝えようとしている。引用7にあるカルムイクの仏教寺院の復興の様子のほか、ブリヤートでは「かつての王や大臣ら[による]悪しき法がなくなり」、人々が「『自治』という権利を獲得して幸福を享受し平和に暮らして」⁽¹⁴⁾いるとし、さらに「ロシア共産党は弱小国家の味方になろうとして」おり「チベットにもそうすると約束して」いるので、同党を「疑う必要はない」と保証もしている。そうしたドルジェフからの情報を受けた13世は、事情をよく理解した旨述べた後、自らの師である「プルチョー・チャンパ・リンポチェのお教えのことは私も承知している」と書いている⁽¹⁵⁾。同リンポチェはドルジェフに先立って親ロシア的な感情を13世に抱かせた人物であるとの指摘があり(Andreyev 2003, 46)、そうだとすればドルジェフは13世の師の言葉を持ち出してまで13世にロシアを信用させようと図ったとも考えられる。

—ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ—

なぜドルジェフは共産党政府の宣伝まがいのことをしようとしたのか。それは、これらの書簡が書かれた 1924 年にいたる時期の共産党内で、「ソビエトロシアについての正しい見方をラサで広める必要がある」という意見があり (Andreyev 2003, 169), ドルジェフがその方針に従っていたためではないだろうか。チベットに書き送った内容は、まさにこの政策に沿うものだったのではないかと考えられる。

ここでいう「正しい見方」とは必ずしも実態を指すものではなく、ロシア共産党政権にとって対チベットの好ましい自画像、つまりチベットとの関係構築を積極的に望んでおり、仏教徒に好ましい環境を整える用意がある者であるという見方だろう。同政権がそのような姿勢を示す努力をしなければならなかった背景には、ロシア共産党あるいは共産主義そのものに対するチベット人の不信感が確かにあった。無神論を唱える共産主義に対しチベット人が脅威を感じるのは自然なことだが、前述のように同党によるカルムイク人仏教徒への大規模な迫害が行われるという事件が実際に起きていた。複数のカルムイク人から直接 13 世らに支援要請の文書が送られたし、彼らのうちの一部がラサに逃れてきたことを記した史料もあるとい⁽¹⁶⁾、同党に対してチベット人たちがもつ危機感や不信感は十分な根拠のあるものだったといえる。また上記引用 1～7 の文書が書かれた 1924 年にいたる頃のドルジェフの行動を追うと、恵まれた環境で宗教活動に専念していたとは考えにくく、むしろ仏教と共産主義思想に協調点を見出そうと奔走している様子がかいま見える。

「公使館代表」本来の職務、すなわち一国の代表として外交活動を行う姿を「ドルジェフ文書」に見出すのはむずかしいが、彼が非公式ながらチベットとソビエトロシアのどちらからも認められ、その枠組みの中で任命国チベットと接受国ロシア、両者の利益のために行動した具体的な姿が示されている。二者に仕えるかのような特異な状況が生じた理由は、国籍としてロシア人であると同時に「チベット仏教世界」の一員であるという彼の 2 つの属性が矛盾しなかったためだろう。そして、そのような二重性が存在しえたのは、ひとつにはチベット仏教信仰が行われている領域を、国境線とは異なるゆるい枠によって囲まれたひとつの有機的なまとまりとすると考え方があり、ドルジェフがそこに属することに違和感が持たれなかったからではないだろうか。その枠が包摂する範囲は、ドルジェフの登場と活躍によって彼以前の時代より拡大していた。かつて彼の最初の入蔵が国禁への命の危険を伴う違反行為であり、またツェンシャブ就任に彼が外国人であるという理由で強く反対する者がいたことを思い起こす時、それはより明らかである。

また、清朝期以来チベットの国際的な地位が不明確であったことも影響しているのではないかと考えられる。チベットが独立国かそれとも中国の宗主権下にある一地域であるのかという問題は未決着のままだったが、チベットが独立国として国際社会で認められ、近代官僚制などそれに必要な体制を整えていたら、ドルジェフが活躍する場は非常に限られたものになっていたのだろう。

4 まとめ

これまで見てきたように「ドルジェフ文書」は完全な史料とはいいがたいが、不足や欠陥を

—ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ—

把握した上で注意深く取り扱うことにより史料として活用することが可能であると考えられる。文書学などにも貢献しうる性質を備えたものであるといえよう。

本稿では「ドルジェフ文書」の概要を限定的ではあるが示した上で、そこに書かれている用件を分析し、さらにドルジェフの「チベット代表」としての一面をさぐることを試みた。彼の地位は公式なものではなかった可能性が十分に残っているが、任命国と接受国いずれもの責務を負うというむずかしい立場にありながら活動していた実態を読みとることができたと思う。また、そのような二重性が可能であった理由として、国家の領域とは必ずしも重ならない、チベット仏教を枠組みとするまとまりが意識されていた可能性を示した。少し違う見方をすれば、「僧」の一般概念におさまりきらないチベット仏教僧の実像を見ることができたともいえよう。

今後の課題として、「ドルジェフ文書」のさらなる読解、チベット仏教世界と周辺近代国家との併存状況、またチベット仏教と世俗化という点にあらわれる 13 世とドルジェフの方向性の違いなどについて明らかにしていきたい。

略号表

- DM 「ドルジェフ文書」, 18575–18623, ロシア連邦ブリヤート共和国ウランウデ市ハンガロフ歴史博物館。

文献表

- Andreyev, A.
2003 *Soviet Russia and Tibet: The Debacle of Secret Diplomacy, 1918–1930s*. (Brill's Tibetan studies library 4). Leiden and Boston: Brill.
- Dhondup, K.
1986 *The Water-Bird and Other Years: A History of the 13th Dalai Lama and After*. New Delhi: Rangwang Publishers.
- 二木 博史
1998 「モンゴル人民党第一回大会とブリヤート人革命家たち」『一橋論叢』120-2, pp. 170–86。
- 石濱 裕美子
2001 『チベット仏教世界の歴史的研究』, 東方書店。
- McKay, A.
2003 “Tibet 1924 : A Very British Coup Attempt?”. *The History of Tibet*. Vol. 3, pp. 405–418.
- Shaumian, T.
2000 *Tibet: The Great Game and Tsarist Russia*. New Delhi: Oxford University Press.
- Snelling, J.
2002 *Buddhism in Russia: The Story of Agvan Dorzhiev, Lhasa's Emissary to the Tsar*. London: Vega.
- 棚瀬 慈郎
2005a 「ドルジェフ自伝 (その 1)」滋賀県立大学人間文化学部研究報告『人間文化』第 17 号, pp. 14–23。
2005b 「ドルジェフ自伝 (その 2)」滋賀県立大学人間文化学部研究報告『人間文化』第 18 号, pp. 29–38。
- Thubten, J. Norbu and Martin, D.
1991 “Dorjiev: Memoirs of a Tibetan Diplomat”. *Hokke Bunka Kenkyu*, 17, pp. 1–105.

注

- (1) ドルジェフにより、13 世の支援とロシア政府の許可を得て、1915 年に完成。
- (2) ドルジェフ以外の受信者として、カンギュルラマ、ワンノルなどの人物名を確認できている。前者はブリヤート出身のトゥルクで、ドルジェフと行動を共にするなど彼と非常に近い人物だった。後者については不明。また、ドルジェフ以外に宛てられた私信がなぜ「ドルジェフ文書」に混じているのかについても、確認できていない。
- (3) Andreyev 2003 はロシア時代のドルジェフとチベットとの関わりについて、これまでの研究史の中でもっとも詳細に明らかにしたものといえる。著者アンドレイエフ自身が指摘しているように史料的制約からチベット側の動向を跡づけることには成功していないし、尋問調書という取り扱いに慎重さを要する史料のみに拠るなど若干安定さに欠ける部分もあるが、初出のロシア語史料を多数活用しており、それによって初めて明らかにされた歴史的事実は多い。現在参照しうる先行研究としてはもっとも詳しく、また偏向性の面でも特に問題が認められないすぐれた研究であると考えられる。
- (4) 1918 年の逮捕は、ロシア共産党の当時の秘密警察組織である反革命・サボタージュ取締全ロシア非常委員会により金品国外持ち出しの嫌疑をかけられたもので、カルムイクからの帰途において拘束の後モスクワの刑務所に護送された。彼の所持品は 2 度目の逮捕後に刑務所の病棟で亡くなった後、ロシア共産党政府内務人民委員部により押収された (Andreyev 2003, 361)。
- (5) 1907 年に新設されたポストで、内閣より上位。
- (6) DM18601 の全文は以下のとおり。本文中に引用した部分は省略し、その旨示した (以下同)。

ched dong/ da lam shing byi bod zla 9 tshes 19 nyin de nas mnam grwa byams pa thogs med brgyud gnas tshul spel 'byor yid la 'drongs/ der gsal 'di nas gnas song der 'byor gang legs thog/ (引用 1) dang/ gtsang zhabs mams kyi gnas lugs skor mkhan mgron lo gsum dang/ mnam grwa byams thogs kyi gnas phul ltar gyi thog/ (引用 2 前半) sog po rgyal khab kyi gdan zhu khyod rang gdong yod thog mi sna ser skya gtung rtsis/ (引用 2 後半) sogs zhib nges gang legs ma zad/ ru rgyal nas tshe ring rdo rje 'am/ sbo ri sogs gtung skabs bka' dgongs btang na 'grigs min brjod par ma nyan pa'i brjod babs zhib rtogs khar/ srid bka'i gnas lan rjes 'bul zhu rgyu dang/ khu ral nas grwa rgyun gdong snyan zhu/ ngos zhe dgu'i zhabs 'bul mtshon byed btang bar skyabs 'jug dgos rgyu sogs de don chog cing/ da dung bstan don snying bcangs kyi der yod mkhan mgron lo gsum bcas par rgyus babs kyi gsar 'gyur gnas lugs byed phyogs kyi mol bsdur zab nan sngar bzhin yod pa yid 'jags byed/ shing byi bod zla 9 tshes 29 bzung por bris/

特に申す。このたび甲子 (1924 年。引用者注) 年 9 月 19 日にナムギェー僧院チャンパトクメーを通じ貴下が送った手紙が届き、[内容を] 理解した。そこに [次のことがらが] 書いてあった。こちらから送った手紙が首尾よくそちらに届いたこと。(引用 1) ツァンの従者らの状況についてはチキャブケンボ、ドンニェルチェンモ、ロツァワの三役とチャムトーからの知らせ通りであること。(引用 2 前半) モンゴル国からの招待 (1924 年 11 月のモンゴル人民共和国建国記念式典への招待であると考えられる。引用者注) [に対しては]、貴下が出席するとともに僧俗の人々を送る予定であること。(引用 2 後半) それらのことは詳しく理解した。またロシアからツェリンドジェカポリ [ソフ] らが派遣される際、命令を出すのはよくないと述べたが聞き入れられなかったという事情は、詳しく理解した。スィールンと内閣への返信を後で送ること、クレーからは三大寺のラマを通じて報告を送ること、私が [ボグド・ハーン] の四十九日の法事に贈り物の代価を送ったことに関し力添えが必要であること等はその通り許可する。引き続き仏教のことを心に置き、そちらにいるチキャブケンボ、ドンニェルチェンモ、ロツァワの三役に新しい情報 [を伝え]、状況への対処方法について以前通り入念に協議するよう心に留めよ。チベット暦甲子年 9 月 29 日吉日に記す。

- (7) 実際には駐北京ソ連大使。
- (8) DM18589 の全文は以下のとおり。発信日の記載はないが、文書全体の体裁の共通性からチベット暦甲子年 11 月 13 日のものと考えられる。

—ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ—

yang bskyar/ zur chung nang gsal (引用 3 前半) ma zad/ rgyal ba'i bka' 'gyur rin po che'i par gzhi gsar bsko'i zhal 'debs su khyod nas rin dang 'khor lo che ba gcig phul 'byor gzhung khrar smin bkod zin cing/ (引用 3 後半) nmams yid 'jags byed/

追伸。別書きに〔次のことが書かれていた〕。(引用 3 前半) また勝者のお言葉が訳されたものであるカンギュルの版木建立への寄付として、貴下から大型の金製法輪 1 点が献上され〔こちらに〕到着した。〔それは〕政府の帳簿に記載済みである。(引用 3 後半) 〔これらのことを〕心に留めるように。

- (9) DM18605 の全文は以下のとおり。

ched don/ da lam shing byi bod zla 7 tshes 9 nyin de nas gnas tshul spel 'byor yid la 'drongs/ der gsal (引用 6) dang/ bka' 'gyur sprul skur cho lo bka' shog sprad rkyen khul der rgyas gshom che bas phyi nang thams cad 'dod mthun med pa/ de'i skor sbo rad thu pas zur du skyabs zhu phul lugs/ khal kha'i dpon rigs nmams nas brdabs mnar tshod med btang ba'i mthar thabs 'bad mus khrims gsar gyi rgyab bsten byang du yod pas rnying pa mgul bskyod ma thub pa dang/ jag dpon bstan pa'i rgyal mtshan khal nub phyogs rgyal sa 'dzin re yod pa/ rgya yul khag gsum byas shing/ ru su shar phyogs su shor ba'i sa cha lag 'byor yong rdzogs bdag/ nang khrims btsan po yod pa/ phyi dgra 'jam la nang mi 'dod pa mang yang nus mthu med pas kho dzo lob de phyogs 'gro tsis byed pa e gtong snyam pa/ (引用 5) zhib nges gang legs ma zad/ sbo rad thu pa rgyud smad dge bshes shes rab bzang po de gar 'chad nyan spel bar gtong dgos thad/ shes rab snying po rgyud stod du bsgrigs zhugs dge bskos zin rjes yul byol song ba de min nam snyam zhing/ de dang chab cig (引用 4) cing/ rgya se 'thag re med pas gos skud ma rnyed pa zhib rtogs/ rgyud bsgrigs 'gal rigs bud mi chog skor lam ngan sgrigs 'dzin 'byung res 'dod gtam bden 'dzin ma dgos/ nub kyi rgyal mtshan babs kyin mdzad dgos thad col chung long gtam la yid dwogs ma dgos pa bcas da dung de phyogs gsar gnas sngar bzhin gtong lugs yod pa yid 'jags byed/ shing byi bod zla 7 tshes 28 bzang por/

特に申す。このたび甲子年 7 月 9 日、貴下が送った手紙が届き、〔内容を〕理解した。そこに〔次のことがら〕書いてあった。(引用 6) カンギュル・トゥルクに官位と論旨を与えたのでそちらの地域では盛大に準備しているが、みながそろって同じ感情を持っているわけではないこと。それについてブリヤート人がひそかに依頼したこと。ハルハの権力者らから容赦ない抑圧が行われた結果、〔様々な〕手段が講じられているが、北に新法の支援があるため旧派は動きがとれないこと。賊長のテンペーゲンツェン [= ジャー・ラマ。引用者注] がハルハ西部で王位を狙っていること。中国が三分しており、ロシアが東方で失った土地をすべて獲得し領有していること。内部の規律が厳格であること。外の敵はおとなしく中は望まない者が多いけれども無力なため、そちらの地方へ行こうとしているコズロフを許さないのではないかという考え。(引用 5) それらは詳しく理解した。またブリヤート人のギュメー寺ゲシェー、シェーラブサンボをそちらへ仏教教育のために派遣してほしいという件については、ギェトウー寺に入ったがゲクーに捕らえられた後に逃亡したシェーラブニンボのことではないかと思う。それと同時に〔依頼のあった〕 (引用 4) 錦を織らせる希望はないが、手に入っていない絹糸について詳しく検討せよ。タントラ学堂の秩序に反する者らの追放を禁止したことについては、悪習を正し把握しようという願いによる〔ものなので〕、恣意的な話を真に受けてはならない。西方の勝利旗を降ろしながら行わねばならないということについては、ばかげた事実無根の話を信じてはならない。引き続きそちらのニュースを以前同様に送るよう心に留めよ。チベット暦甲子年 7 月 28 日吉日に。

- (10) サンクトペテルブルクから 1914 年に改称。1924 年からはレニングラード。引用 5 の DM18605 (1924 年) では「ピティル」と表記されている。
- (11) DM18602 の全文は以下のとおり。発信日の記載はないが、内容から判断して 1922 年以降のものと考えられる。

yang skyar/ zur chung nang gsal sngar ru su'i 'og tshud mi ngan nmams rang dbang thob pas skal pa bzang por yod pa dang/ dmar po shog gi las khungs chen po de'i srol 'dzin gtso bo mo si kha pa zhes pa'i grong 'khyer du gnas pa/ (引用 7) zhib rtogs gyur cing/ 'di nas kyang spyi bye'i re don yid bsam ltar 'grub pa'i

—ダライラマ 13 世とアグワンドルジェフ—

skyabs 'jug gi rwa bar btsud zin pa yid 'jags byed/

追伸。別書きに〔次のことがらが書かれていた。〕先にロシアの支配下に入った悪人たちは、自由を得たことにより幸福になったこと。共産党の大規模な組織の伝統を掌握している中心人物がモスクワという都市にいること。(引用 7) それらの事情を詳しく承知した。こちらも全体および個々の希望が思いどおりに成就するように支援する状態にあることを心に留めよ。

- (12) 1913 年、内閣発信の DM18579 には、ドルジェフがかつて「ロンドンへホトクトの地位をもった名代としていらっしゃった」lanDan la ho thu'i go ming thog sku tshab tu phebs zin という記述がある。
- (13) 'dir bcar sbo ri sob 'di bzhin shes yon che zhing/ rgyal khab nas yid 'ches byed pa/ sba yar thu chos snang dkar khar/ khyod rang gi slob mar brten 'phral phug gang ci'i skor nang mol mdzad 'thus de don bgyid zin (DM18590) .
- (14) khul der sngar gyi rgyal blon nmams kyi khirms ngan med pas ag tho no mi zhes pa'i dbang thob nas bde skyid kyi dpal la spyod pas (DM18597) .
- (15) ru dmar 'di bzhin rgyal khab nyams chung khag la phan nges kyi bod du'ang de don byed rgyu'i khas blangs yod pa/……ru dmar la blo dwogs mi dgos pa sogs zhib nges gang legs khar/ mkhan chen yongs 'dzin phur lcog byams pa rin po che'i zhal gdams skor ngos nas kyang blo rtogs yod mus (DM18598) .
- (16) 1931 年にドルジェフの弟子に対して行われた尋問調書 (Andreyev 2003, 136)。

付 記

本稿の基礎となったウランウデ市における史料調査は、東京外国語大学大学院教育改革支援プログラム「高度な言語運用能力に基づく地域研究者養成」の支援を得て実施した。